

ロウイングは、ロウアウト精神や、クルーとしての一体感を培います。おごりを捨て、人を思いやる気持ちの成長も試されます。

1 語源

オアズマンシップというのは、英語の本来の意味は、ボートを操る「技術」のことです。このスポーツの起源となったテムズ川で、職業として船を漕いでいたウォーターマンに由来し、ウォーターマンシップとか、シーマンシップとも言われます。精神的な意味合いよりも、艇を操る技術の意味です。

しかし、日本では、これにスポーツマンシップと同様の精神的な意味合いを加えて用いてきました。ここではその慣例に歩み寄り、ロウイングというスポーツの精神世界を少し紹介しましょう。

2 スポーツマンシップ

オアズマンシップは、スポーツマンシップと同じく、このスポーツを愛し、ルール、マナーを守り、競漕相手や運営スタッフなどに経緯を持って行動するフェアプレイの精神、全力でベストをつくすロウアウト精神、チームワーク。そういったものと同じことですが、以下、いくつか特有の表現、考え方を紹介しておきましょう。

3 ロウアウト精神

全力を尽くすこと。レースの最後の瞬間、フィニッシュまで漕ぎ尽くし、果てようとするのがロウアウト精神です。レースにどのように取り組むかは、クルーの勝手、スポーツの自由という側面もあります。しかし「全力を尽くさないことは、全力で競おうと練習し向かい合う競漕相手に対し失礼だ」という発想のほうが、よりマナーとスピリットのレベルが高いと言えるでしょう。スポーツとしての自由と、競漕の礼儀のバランスを探りましょう。



(nlroei より)

運動生理学的には、フィニッシュの瞬間、急に動作を完全停止すると、それだけで心臓に負荷がかかり、一見ロウアウトしやすくなります。というか、昔はそのメカニズムがわかっておらず、ロウアウトをしていたくらいがあります。フィニッシュの瞬間に完全停止せず、緩やかなノーワークに移行することが、体のためには重要です。

4 一艇ありて一人なし

「一つの艇を漕ぐクルーは、ばらばらの個人はなく共同体」という意味です。乗艇し、一緒に漕ぐ間は、動作を一つにし、漕ぐことに専念する、そんな気概、一体感がロウイングにはあります。

このように動作をそろえるタイプの持続出力型のスポーツはそれほど多くはありません(例:綱引き、タンデム自転車)。このユニフォームもまた、先に述べた、ロウアウトと含め、ロウイング特有のスピリットを形成しています。苦しくて漕ぎやめたくてもやめるわけにいかない、ボートの中で「自ら進んで」歯車の一つとなり全力を尽くすことが、精神を鍛えます。妥協せず、苦しい練習に耐え抜く。クルーで一体になってがんばる。それはとても素晴らしいことです。厳しいレースに臨み、全力で取り組むこと

は、そのクルーや選手本人にとっては、とても素晴らしい価値観であり、それを人生の礎とするのは本当に素晴らしいことです。

別の言い方をすれば、「ロウイング(クルー)に、エースもヒーローも要らない。」ということでもあります。

5 礼に始まり礼に終る あるいは 平常心

リオ五輪2016では、柔道の太田選手への優勝後の礼儀をわきまえた態度が賞賛されました。単なる競技選手というだけでなく柔道家としての態度に、改めて柔道に対する評価が高まりました。剣道では「平常心」という言葉も言われます。しかし本来、それらは「アスリート」という言葉にもすでに含まれているべきことです。もちろんロウイングも、平常心を持って、常に礼儀正しい態度で、競争相手や大会運営者、応援者などに礼儀と敬意を持って接する人格を備えたいものです。

エピソード: スティーブ・レドグレーブは、84年から連続5個の金メダルを獲得した英国の偉大な漕手です。糖尿病と戦いながら金メダルを得たシドニー五輪の優勝会見での言葉:「競技を終えたら、レースに出た選手全員と互いに健闘をたたえ合いたい。僕はメディアに話をするために競技しているのでは決してない」と。立派な表彰ステージの勝者と敗者のメディアの扱いの落差、それに引きずられる大会運営への苦言でした。レースの前・後、勝者も敗者も関係なく、平等・公平な運営がなされ、スポーツマンシップが健全に維持される、クラブや協会、大会の運営にもまたオアズマンシップが問われなければなりません。(参考:共同通信社ウェブサイト「シドニー日記」9月24日、「五輪選手はみな平等/王者の気骨に触れる」より)

6 みんなのためのスポーツ

Rowing For All

この競技スポーツに、「エリート」あるいは、「ハードネスに耐える限られた人間だけに許されたスポーツ」といったイメージを重ねる人もいます。「選ばれし者のスポーツ」という言い方がされることもあります。個人的にはこの言葉は好きではありません。(個人がロウイングにどんなイメージ、プライドを持つかは全く自由ですが)その発想が、エリートだというおごり、うぬぼれ、だめなヤツはこのスポーツをする資格はない…というような、人を蔑む発想に陥るとしたら、それは大きな間違いです。

スポーツとしてのロウイングは、懐を広くして、漕ぎたい人の誰もが、「ルールとマナーを守る限り」、その人なりにできる範囲で、できるなりのスタイルで漕ぐことができる、そんな世界でなくてはなりません。自己のロウイングから、クルー、チームワークへの意識の発展、さらに、隣人のロウイングを支援する意識を持つべきです。

もちろん、「自分の、あるいは自分のクルーの向上だけに専念、それで精一杯だ」という人もいます。また、「自分の練習以外に眼を向けるのは、オアズマンとしてベストを尽くすことができていることではないか」というような脅迫観念に囚われている人もいます。しかし(仮にそうだとしても)、つまり、(短い時間で見れば)練習時間が削られ、少タイムの短縮が先延ばしになるかもしれないとしても、自分自身を鍛えることだけに終始せず、周囲に眼を配り、強くクルーを導き、また同時に、周囲の弱い人や、漕ぎたくても漕げない人に、同じ目線で、手を差し出してほしい、と思います。

それは、人生のスパンで見れば、そのロウイングスタイルはきっと、あなたのロウイング自体をより強い、より高いレベルに到達させる支えとなるでしょう。そして、それ以上に、きっと人生の中でロウイングが意味のある経験になるはずですよ。